

## 元禄期における字音M尾N尾の発見 : 中村惕斎の 「韻学私言」

岡島, 昭浩  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10445>

---

出版情報 : 文献探究. 18, pp.29-36, 1986-09-18. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 元禄期に於ける字音M尾N尾の発見

—— 中村惕齋の「韻学私言」 ——

岡島昭浩

漢字音韻尾の舌内と唇内とは、舒聲の場合、その区別は早く失われた。後、この二者の区別を正しく説いたのは大田全齋、義門、関

政方がほぼ同時代であったというから、これはもう江戸時代も後期である。意外に遅い感がある。悉曇学では三内の区別が説かれ、そのことは本居宣長も知っていた。しかし宣長は「地名字音転用例」では、「ん」「む」がナ行マ行に転用されることに気付きながらも、「漢字三音考」「字音仮字用格」でその区別を認めなかった。入声では韻によってフ対ツ・チに分かれることに気付きながらである。その点は義門や関政方の指摘の通りであろうが、宣長の研究なくしては義門らの研究の進捗も遅れていたであろうことは満田新造氏も述べるところである。<sup>(1)</sup>

しかし、それ以前には本当に全く二者の区別に気付いたものはないのであろうか。「男信」も引くように多くの学者がムとンの使い分けを考えてきた。開口と合口、上平と下平がそれぞれムとンに対応する、などというものである。しかしそれらの他に、義門の目には触れなかったにしても、正しく使い分け出来たものが有ったことも当然考えられるわけである。ここに紹介する中村惕齋の「韻学私言」はそういった資料の一つであると思われる。義門らのように、国語の中での使用には言及してはいないが、韻によってン（惕齋はニ・ヌとする）とムの違いの有ること、その韻は対応する入声によって見分けがつくこと、などに著者惕齋が気付いていたこ

とがうかがえるものである。時代は本居宣長よりも古く、元禄にまでさかのぼる。

## 二

「韻学私言」は九州大学付属図書館蔵文庫蔵である。「国書総目録」では「近世漢学者著述目録大成等による」とあり、他にもいくつかの目録に当たってみたが、九州大学以外に本書を蔵しているところがあるのかは不明である。叢書・日本の思想家十一「中村惕齋・室鳩巢」（昭和五八年）の中村惕齋の部の著者である柴田篤氏にも口頭で伺ってみたのだがご存じないということであった。なお、近世漢学者著述目録大成<sup>(2)</sup>の基づくところであろう「近代著述目録」に二巻と見え、「典籍作者便覧」<sup>(3)</sup>には一巻と見える。また、惕齋の「筆記書集傳」<sup>(4)</sup>の巻末所載の「中村惕齋先生著述書目」に「韻学私言 未刻二巻」、「明和九年刊書籍目録」では、「韻学字書」の条、「韻学發蒙」の次項に「一 同私言 惕齋」とある。

この九大本「韻学私言」は大本一冊墨付四九丁・非常に丁寧な写本で、「本是、リ行、異、」などの注記がある。二一丁裏のみ別筆のようだが、六丁裏欄外に「信按」とみえるのは、この書写者が或いは「信」のつく名を持っていたのであろうか。

表紙は緑色。題簽子持の刷粋に本文とは別筆で、「韻学私言 全」とある。内容は全文漢文（ただし片仮名の振り仮名あり）。自序が一丁半（一オ〜二オ）、「元禄壬申中秋平安仲欽敬南具紳」として書かれているから、元禄五（一六九二）年のものである。以下、

論聲音之用	三才	論庚京扇牖四韻	二九ウ
論聲音韻名義	三ウ	論根棍二韻	三〇才
論五官本聲之生成	四ウ	論巾鈞二韻	三〇ウ
論五官支聲	八ウ	論金簪二韻	三一才
論五官轉聲	九ウ	論乖詖皆三韻	三一才
論五官寓聲	一〇才	論瓜嘉拏迦澁五韻	三一ウ
論四聲	一一才	論戈歌二韻	三二才
論七音字母	一三ウ	論官干二韻	三二才
論字母清濁通例	一六才	論涓堅二韻	三二ウ
論轉聲	一八才	論兼韻	三二ウ
論舌聲	一八ウ	論關艱二韻	三三才
論重唇聲	一九才	論甘鹽二韻	三三才
論齒聲	一九ウ	論高韻	三三ウ
論喉聲	二一才	論交韻	三三ウ
論輕唇聲	二二才	論鈞鳩二韻	三三ウ
論二半聲	二二ウ	論反切	三四才
論音韻有粗細圖尖	二五才	論華梵字音	三五ウ
論韻目	二五ウ	論國字	三七才
論開合内外韻	二七才	論五音圖	三八才
論公弓二韻	二八才	後論	四〇才
論岡光江三韻	二八ウ	七音字母清濁圖	四一才
論騎高交三韻	二八ウ	字母清濁橫圖	四二ウ
論基規賢三韻	二九才	五音十母圖	四四才
論居姑二韻	二九ウ		

と、なっている。「韻鏡」の他に「字彙」（韻法横直図、韻目名も本書による）、「古今韻会舉要」、「韻表」、「通雅」、「音韻日月燈」等の小学書や「通志」、「夢溪筆談」等の諸書を引用し、漢学者らしい著

作である。「通雅」などは康熙丙午（一六六六年）の序を持ち、近刊の書である。図書では「文鏡秘府論」、「清氏神代紀抄」等を引く。著者の中村惕齋は寛永六（一六二九年）—元禄一五（一七〇二）年。京都の人。名は之欽、字は敬甫で号が惕齋だが、序に見えるように仲欽と修した。詳しくは前掲柴田氏著書を参照。また、「惕齋先生行状」が勉誠社「近世文学資料類從 参考文献四「訓蒙図彙」に取められている。

惕齋は伊藤仁斎と並ぶ儒学者として著名で、漢籍国字解を多く著しているが（「——示蒙句解」の名で、「四書」「孝経」「小学」「近思録」）、語学、音韻学関係の著述は本書の他にはないようである（訓点史や近世字音資料としての研究はある<sup>5)</sup>）。

九州大学付属図書館碩水文庫は明治の崎門学者楠本碩水の旧蔵書からなっているのだが、ここには中村惕齋の著作が多く集めてある。「筆記書集傳」の巻末所載の「仲村惕齋先生著述書目」に未刻とある「惕齋文集」も写本でのこっており（一三卷一冊）、通覧してみたが（「韻学私言」序は巻十におさめる）、語学、音韻学関係のまとまった論述はない。ただ、時に漢字に唐音が付してあるものがある（祝文、行禮など）ことは注目に値しよう。黄檗僧との文通もある（「惕齋文集」巻六）、唐音の知識はこの方面から得たのであろう。

また、やはり碩水文庫蔵の「仲子語録」には「韻学私言」に言及するところがある。この書は惕齋の弟子の増田謙之（「惕齋先生行状」の著者）が惕齋の言状を記録したもので、大本六卷一冊の写本で巻末に「寛延二年巳九月初丑校合了」の識語がある。増田謙之は字益夫、号立軒、延宝元（一六七三）年—寛保三（一七四三）年。阿波の人である。本書の「韻学私言」言及部分に関しては後述のこ

ととする。

「韻学私言」のM尾N尾の区別は「論四聲」「論開合内外韻」等の条に見える。

今作口訣曰、烏、奴、尼、夷、誤為長尾、狐、追、度、起、布、為短脚、凡入聲必隨長尾之韻、如東冬江陽、以烏字曳之、則屋沃覺藥、以鼓字収之、寒刪先、以奴字曳之、則曷黠屑、以追字収之、真文元、以尼字曳之、則質物月、以度字収之、庚青蒸、以夷字曳之、則陌錫職、以起字収之、侵覃鹽、以誤字曳之、則緝合葉、以布字閉之、試鼓烏、追奴、度尼、起夷、布誤、連呼、則兩々自相諧、可以見此說之非誣矣、此間與音、以布追鼓度起為入尾、則亦可信其有來由在矣。（論四聲）

欵按東冬江陽是烏之長尾、入聲以鼓収之、魚虞蕭肴豪尤是烏短尾、佳灰支微齊是夷之短尾、歌以沃為尾、麻以邊哇鴉為尾、並無入聲寒、刪先、以奴曳之、入聲以追収之、以上為中韻二十、庚青蒸則夷之長尾、入聲以幾収之、是為内韻三、真文元以尼曳之、入聲以度収之、是為外韻三、侵覃鹽咸以誤合之、入聲以敷閉之、是為合韻四、通雅云、閉韻無開唇之聲、亦謂合韻矣。（論開合内外韻）

舌内韻尾と唇内韻尾を峻別することに眼目をおいていないのではないが、この二者は混じることなく分かれていたことがわかる。各々の韻を論じている箇所でも、根視韻、巾釣韻ではニとチ、官干韻、消堅韻、開韻でヌとツ、金響韻、兼韻、甘鹽韻でムとフである、としている。本居宣長が唇内と舌内はム対ヌであるべきだ、としたが、韻の区別には言及しなかったのに比較すると、ニチ韻とヌツ韻とムフ韻に分った点で進んでいるといえよう。ただ宣長は、日本で

の用法として区別がない、としたとも考えられ、その点、理論からだけの悞齋とは立場が異なるわけではある。

理論だけからといっても、唐音の知識はあった。本居宣長も「今ノ唐音ニテモイサ、カ差別アリテ、ヌニ近ク聞ユルト、ムニ近ク聞ユルトガアレバ」と記している（漢字三音考）、また、文雄の唐音や、黄葉の唐音にも区別が見える（文雄は唇内全てム、舌内ン主流ム混入、黄葉の「天和版観音経」は舌内全てン、唇内ムン併用）ので、当時日本に渡来した唐音に舌内、唇内の区別のあるものもあつたことがうかがえる。悞齋の聞いた唐音もこの種のものであつたことは大いに有りうる（「韻学私言」に見える漢字の読みは、唐音に基づくものであろうが、演繹的処理がされており、韻尾にニヌなどがあらわれる。また「悞齋文集」に見える唐音では捲韻尾は全てンで表記されている）。

上引の「論開合内外韻」で、東冬江陽韻のウと魚虞蕭肴豪尤韻のウ、庚青蒸韻のイと佳灰支微齊韻のイを区別出来ているのも、四聲相配による理解のほかは唐音の知識の有ったことが関係しよう。

「仲子語録」卷三には、「韻学私言」に言及するなど、字音関係の記述があるが、次のような部分がある。

字彙尾卷ノ韻法横圖ハ、三十六字母ヲ舉テ七声ノ例ヲ示シ、又一声中ニテ合口撮口等ノ例ヲ挙テ例ヲ推テ知ルベカラシム、合口ハ只口ヲ合ハスソ、撮口ハ口ヲツボメル也、開口ハ只口ヲ開ナリ齊齒ハ齒ヲソロヘルナリ、混ハ一ツニ混スルソ、閉口ハ口ヲ閉テムバ子ニスル也、抑一字母ノ下ニテ各五段ニ分ルハ何ソヤ、音ノ相類スルヲ以テナリ、タトヘハ公鞞ハ皆ウバ子、庚京ハ皆イバ子はヲ一類トシ、棍君根巾皆ニバ子、金ハムバ子、是ヲ一類トシ、光姜皆ウバ子ニテ又稍ヒロシ、是ヲ一類トシ、規居皆イドメ、是ヲ一類トシ、乖皆イドメニソ又稍ヒロシ、大抵如此音ノ相似タルヲ

以テ分ルナリ、凡ハヌルニ五品アリ、曰ンハウバ子也、曰ヌハヌバ子也、曰ンハイバ子也、曰ニハニバ子也、曰ムハムバ子ナリ（卷三）このように、喉内韻尾を「はね」とらえているのは唐音の知識が当然関連しているはずである。ウバネをン、イバネをノ、と区別して表記しているが、舌内韻尾をヌとニとに書き分けるのに対応するものである。このソノの書き分けは「韻学私言」にも見える。例えば、その最巻末の「三十韻目」をあげると、

東<sup>トウ</sup> 冬<sup>トウ</sup> 沃<sup>ワク</sup> 江<sup>カウ</sup> 覺<sup>カク</sup> 陽<sup>ヤウ</sup> 藥<sup>ヤク</sup> 魚<sup>イユ</sup> 虞<sup>イユ</sup> 佳<sup>カ</sup> 灰<sup>ク</sup> 支<sup>チ</sup>  
 微<sup>ミ</sup> 寒<sup>カン</sup> 曷<sup>カク</sup> 刪<sup>セン</sup> 黠<sup>シヤク</sup> 先<sup>シヤン</sup> 屑<sup>シヤク</sup> 蕭<sup>ヒョウ</sup> 肴<sup>ハウ</sup> 豪<sup>カウ</sup> 歌<sup>カ</sup> 麻<sup>マ</sup>  
 尤<sup>イウ</sup> 庚<sup>カウ</sup> 陌<sup>ハク</sup> 青<sup>チン</sup> 錫<sup>シキ</sup> 蒸<sup>チン</sup> 職<sup>シキ</sup>

「東冬江陽」にン、「庚青蒸」にノを使っている。なお、これを見てもM尾N尾が使い分けられていることが明らかであろう。

また、「字彙」の引用は「韻学私言」にも有るのだが、この閉口をムバネであると認識できたのがM尾N尾の区別をなしたことにつながる。「字彙韻法横圖」は明の梅膺祚「字彙」の巻末に作者不明の「韻法直図」とともにおさめられている。李世澤作の韻図である。「字彙」の和刻は慶安元年の古い時期のことであるが、河野通清の「字彙巻末解」は享保一八年まで下り、しかも通清の注が韻図への注になっていないのと比較すると、楊斎の「字彙」利用の速さが知られる。

後世のことになるが、やはり「字彙韻法直横圖」を引用した文雄などは恐らく閉口と合口とを混同してしまったために、開口合口ムという区別を立てることになったようである。前述のように、文雄は唐音では韻尾のMとNとを聞き分けることができたようである

が、四声相配の原理（舒声と入声の調音位置の一致）に気付かず、別の原理を探したために誤った区別をしてしまったのであろう。これは中国原音のわにも責任があると考えられるのだが、これに関しては前述の黄葉唐音の問題と共にまた別の機会に論じることとしたい。

さて、楊斎がM尾N尾の区別をなしたのには、引用書が存在があるわけだが、上に挙げた「字彙」の他に「韻表」の影射も大きいといえよう。「韻表」は「通雅」と並んで引用数の多い書である。この「韻表」は、趙蔭棠（憩之）氏の「等韻源流」（一九五七年元刊、今一九七四年再刊本一五六頁）によれば、

韻表頗罕見、據我所知、故宮圖書館、北大研究所、馬幼漁先生藏各一部

とあるが、我が国では内閣文庫に蔵している。「韻学私言」中では前掲の「論開合内外韻」の「欵按」に先立つ引用が重要である。

開口音則掀唇而見齒除合韻侵覃鹽咸合口音則呼畢閉唇侵覃 向外除内外合之外皆為開口

音則深舌而近喉庚青 向外音則淺舌而近齒真文 居中音則不向内外合之

向外而統在中間除内外合之外皆為中

「閉唇」という言葉が「閉口」というよりも具体的に分かり良かったのではなからうか。また、「字彙」とは違って「韻表」の韻目名が韻鏡等と同じであったことも、楊斎の四声相配への理解を助けたとも考えられよう。

以上のように楊斎は、M尾N尾の区別を発見であるとは認識していなかったにせよ、この二者は韻によって区別すべきものであると判断していたと見做される。

M尾N尾の區別を明言していた中村惕斎の「韻学私言」ではあるが、文雄・義門・大田全斎等、後世の研究者に影響を与えることはなかった。舌内韻尾をンで書かずにヌ・ニで書くところなどは大田全斎の態度と共通するのであるが、影響関係はあるまい。

結局は本書が出版されなかったことが、流布しなかった理由であるのだろうが、本書を引用した文献も存在する。安永六年刊谷川士清の「倭訓栞」がそれである。その巻首の「大綱」には七ヶ所に「韻学私言」の引用がある。「韻学私言にはく」という引用の仕方がおおいが、「仲氏も……といへり」と第五条（原典に番号は付されておらず、私に打った通し番号である。通行の井上頼因・小杉樞邨の「増補語林倭訓栞」では九頁、勉誠社文庫一二一尾崎知光編「倭訓栞大綱」では一八頁）に見えるのも「韻学私言」（論華梵字音）からの引用である。他に、第二五条（増二一頁、勉三三頁、論國字より）、第七二条（増四三頁、勉五八頁、論五音圖より）、第一〇六条（増五六頁、勉七四頁、論五官本聲之生成より）、第一五〇条（増七一頁、勉九一頁、論四聲より）、第一五四条（増七三頁、勉九四頁、序より）、第一五七条（増七六頁、勉九七頁、論國字より）に引用がある。また、出典は記していないが第四条（「鄭夾漈が説に」として「通志」六書略の論華梵を引く）も次条の「韻学私言」の引用部分の直前に、本条と共通する記述があることから、「韻学私言」からの引用であろうと推定される。また「大綱」の部分だけでなく、本文「倭訓栞」前編の冒頭「あ」の条にも「仲氏も……といへり」と引かれている（論五官本聲之生成より）。

「倭訓栞」の著者の谷川士清は漢学の方面では崎門に属するのであるから、崎門ではない中村惕斎の書物が特に見やすい環境にあったというわけではなさそうである。とはいうものの、惕斎の著書を

多く集めた楠本碩水もやはり崎門であったというのが気になる。惕斎が啓蒙的な国字解を数多く著している点から、崎門のがわで惕斎の書を参考にすることがあったのだろうか。また、惕斎と親しかった藤井懶斎・米川操軒は山崎闇斎と関係があったが、懶斎は惕斎との交際以降は崎門から離れていったといふ<sup>⑧</sup>。

「韻学私言」を「倭訓栞」が引用しえた理由はともかく、「倭訓栞」に引かれたことよって「韻学私言」は人目に多く触れることとなる。金田一春彦氏「国語アクセントの史的研究——原理と方法」（昭和四九年）の二三九頁に「韻学私言」がひかれる。アクセントを高低ではなく、深淺であらわした文献としてである。

本邦之語、猶華城之音、今呼柿、曰葛幾、則雙深、曰濁起、則雙淺、俱無高低而平声也、呼垣、曰葛起、則先深後淺、而如上声、呼蠅、曰濁幾、則先淺後深、而如去声

金田一氏は以上を引用して、

この場合、「深」は「高」の意、「浅」は「低」の意かと解せられるが、これまたアクセントを現わしたものと見られる。と解かれる。

また、井上與本氏の「日本語調學小史」（「音聲の研究」2昭和三年）でも「（九）節式其他」に「参考に價する」文献として書名が見える。金田一氏・井上氏は「韻学私言」が佐藤寛氏の「本朝四聲考」（国学院「国文論叢」明治三十六年）にひかれている、とするが、この「本朝四聲考」の「韻学私言」引用は「倭訓栞」からの孫引きとおぼしい。「本朝四聲考」中に「韻学私言」の引用は三ヶ所あるが、それは全て「倭訓栞」に引用される部分に含まれる（三〇二頁・七二条、三〇八頁・一五〇条、三三二頁・一五〇条）。そして「本朝四聲考」では他の個所で現に「倭訓栞」を出典明記して引用している（三〇二頁の「韻学私言」引用部分の直後「倭訓栞に、五

音十行の歌、また音韻相通假字反圖を擧げて」が、「韻学私言」以外でも出典を記さずに、明らかに「倭訓栞」からの記事を引くことがある（二九二頁「古は、開合正しく」は第一条より）からである。また、楊森はアクセントの語例としてカキ（柿、垣、蟻）、ハシ（端、橋、筋）をあげるのだが、そのうちハシは「倭訓栞」に取られておらず、また「本朝四聲考」にもない。つまり、先引の「如去聲」の後に、「倭訓栞」「本朝四聲考」では、

又如上下二字、各上去兩聲、互異其義、而與國語、自相符

と続くのだが、原「韻学私言」では、以上の文の前に次の文章が続くわけである。

如端為法失、橋為法實淺音、筋為乏淺音失亦然矣

金田一氏が「深淺」の表現に着目して引用する部分は「論四聲」の条下で、その前に深淺と高低の関係について説明があるが、実はよくわからない。

凡聲深呼者、聚而實、實者其調自昂而高、其尾必淺而低、是為上聲  
聲淺呼者、散而淡、淡者其調自低而卑、其尾必深而昂、是為去聲  
聲が深ければ自然と高くなり、浅ければ自然と低くなる、というわけである。

また、カキ・ハシの例で言うようにと深に葛・幾・法・失の字を用い、浅に渴・起・乏・實の字を用いている。この深淺（高低）による文字の使い分けは、本書の「字母清濁圖」と対照することによって、声母による使い分けであることがわかる。

「字母清濁圖」は「韻法直図」の三二声母の下に「葛幾狐結箇」の如く、日本語の五母音に対応するように並べているものである。それぞれの字は「韻法直図」中のものであっており、ア列は主に琴韻によっているが、適当な文字がない場合に曷字を用いる。イ列は支微韻に質韻、ウ列は虞韻、エ列は屑韻、オ列は屋沃韻から取る。

そしてこの三二母それぞれに深清、浅清などを付しているのが、破裂音・摩擦音の、全清（見端精精照）→深清、次清（溪透滂清穿）→浅清、全濁（群定並從林）→重濁、次濁（疑泥明、破裂音系ではないが微来日も）→輕濁、としていて、摩擦音系の全清（心審曉非）は輕清、全濁（邪禪匣奉）は淺濁、數母は淺清、また、影母は深清、喻母は輕濁、とする。この「字母清濁圖」は「依字彙韻法直圖」とあるが、「字彙」にはこのような輕重清濁淺深は記されていない。これを先程のカキ、ハシと比較すると、葛幾は深清、渴・起は淺清で（「字母清濁圖」では「渴企枯契哭」とするが、後掲の「五音十母圖」で「企」と「起」は同音と知れる）、法・失は輕清、乏・實は淺濁である。つまり、淺音（低音）には淺濁・淺清という声母の文字を使い、深音（高音）には深清・輕清という声母の文字を用いるという（淺へ低へ→深・輕へ高へ）、一種の（アクセントによる文字の使い分け）が存するわけである。この使い分けが字音の声調ではなく、声母によっているのは珍しいことであろう。しかし、このようなアクセントによる文字の使い分けもこの「論四聲」の条にのみ限られていて、他の箇所には見られない。

なお、カキ・ハシの後の部分でアゲサゲのサに「沙」の字が使われている、「淺音」と注記がある。ところが、この字は「輕清」の字で、本来深音に使われるべきものである。しかし、「字母清濁圖」の淺濁の箇所の、サの位置には文字がなく、「○禪實瑞舌屬」となっている。これでは使い分けをしようにも文字が無いわけである。仕方なく、淺音字を使ったのであろう。

#### 四

「倭訓栞」のように流布はしなかったが、「韻学私言」を引用した書がもうひとつある。内閣文庫蔵の「韻學捷徑切韻纂要」がそれである。本書は岡井慎吾氏「日本漢字学史」（昭和九年刊）三二六

頁に見える。

寫本二卷、淺草文庫の舊藏で今は内閣文庫。西村重慶の求源抄（磨光韻鏡餘論による、未見）や諸抄大成を引いて居るから今こゝに序でる。上卷には聲音の源、五十字の起り附梵漢字などの題目を立て、之を説き、下卷は全く十二反切を述べて居る。三十六字母から知徹澄孃を除いて居るも韻會あたりの影響。書中往々韻學私言と仲敬の説（ともに漢文）とを引くが、今その存否を知らぬ。

大本で乾坤の二卷二冊。乾卷は墨付六五丁、坤卷一六丁、序跋なし。岡井氏は「韻學私言」の存在を知らなかった。そして「韻學私言」と仲敬の説を別物と見たようである（「私言仲敬甫云」の書き方もあるのだが）。仲敬（甫の説である）の説は全て「韻學私言」のうちに見える。この二書を照らしあわせてみると、出典を記さずに「韻學私言」を引用することも多く、「往々」どころではなく、かなり引用の仕方、特に上卷は「韻學私言」の祖述ともいえるほどである。構成も順不同ではあるが、「韻學私言」のものを借りてい

上卷 辨説	「韻學私言」対応箇所
論聲音之源	総論聲音韻之用
聲音之名義	論聲音韻名義
辨五音圖	論五音圖
辨五十字起	論五官本聲之生成
辨單聲引聲	
五十字配於五音歌	（論五官本聲之生成の一部）
假名反之法	
梵漢字論	論華梵字音

論國字國語	論國字
三十六母辨	論七音字母 七音字母清濁圖
論清濁	論字母清濁通例
七音辨	
韻音	論韻聲
舌音	論舌聲
唇音	論重唇聲 論輕唇聲
齒音	論齒聲
喉音	論喉聲
二半音	論二半聲
辨四聲	論四聲
反切辨	論反切 （論七音字母の一部）
列圖辨	
內轉外轉之辨	論開合内外韻
音韻有粗細圓尖辨	論音韻有粗細圓尖
三所開合之辨	
三十二位配合捷徑之文	（論字母清濁通例の一部）

以上のような構成で、殆どの条は、まず「韻學私言」を延々と引用して、その後に「韻鏡開卷」（自等庵宥朔、寛永四年刊）や「韻鏡求源抄」（西村重慶、貞享二年刊）や「韻鏡同答抄」（湯淺重慶、貞享四年刊）や「韻鏡諸抄大成」（馬場信武、宝永二年刊）や「悉曇三密抄」等を引用するとかたちである。なお、下卷は十二反切を解いていて「一切韻指掌」を多く引く。「韻學私言」の引用は見られない。なお、岡井氏が「韻會あたりの影響」という三十二字母は、先にふれた「韻表」によったものである。

「韻學捷徑切韻纂要」は内題の後に「武江二山習堂門人 服部恒齋纂集 二山格堂考訂」と見える。服部恒齋に関して不明である



が（「国書総目録」著者索引でもこの書のみ）、二山氏は二山時習堂、格堂の親子である（「時」脱か）。時習堂、名は義長、字は伯義、元和九（一六二三）年—宝永六（一七〇九）年。格堂、名は道高、字は游翁、延宝五（一六七七）年—寛保三（一七四三）年。二山時習堂はその著書「朱王學辨」に中村悒齋から序文を寄せられており（元禄八年、「悒齋先生文集」巻十にもおさめる）、悒齋と関係のあったことが知られる。服部恒齋がこの書を見たのも、この縁であろうか。なお、格堂の没年と、引用される「韻鏡諸抄大成」の刊行年を考えると、本書の成立は宝永二年から寛保三年までの間にならう。

以上のように「韻学私言」は後世に影響を与えることはあまりなかったが、漢字音研究史上に記録されてしかるべき文献であろうと考えられる。

その紹介の仕方が雑然としたものになり、内容にまで深くいたれなかったのは本稿筆者の非力によるものである。とりあえず、M尾N尾への言及と後世への影響の問題に焦点を絞り、報告をする次第である。

＝ 注 ＝

(1) 「字音に於けるM尾N尾の發見に就て」（『中国音韻史論考』所収・元載「国学院雜誌」大正十五年三月号）

(2) 勉誠社『近世著述目録大成』による。

(3) 「京師 植村藤右衛門 北村四郎兵衛 阿波 小西吉兵衛 宮島 屋伊左衛門」と刊記にある書である（刊年不明）。「先哲叢談」

卷四の仲悒悒齋の条では「筆記詩集傳」の巻末に著述目録があるというが、ほぼ同一物であろう。ただ「先哲叢談」では四五部三一八巻、鏝梓一六部、一七四巻とするが、これは四六部三三六巻、既刻一七部一七八巻の計算になる。なお九州大学付属図書館には「筆記書集傳」が三部、「筆記詩集傳」が二部ある。「書集傳」は三部中二部に著述目録があり（同版）、「詩集傳」はいずれにもない。

(4) 京都 武村新兵衛刊。斯道文庫編、江戸時代書林目録集成「三卷二〇〇頁」。

(5) 松井利彦氏「近世漢字における漢字音の位相」（『国語国文』四〇—五）。木村秀次氏「『四書示蒙句解』における漢語——現在と読みを異にするもの——」（『中田祝夫博士 功績記念 国語学論集』）等。

(6) 「磨光韻鏡」ではムとンは漢音と呉音に関する限りは使い分けていないが（ムは使われない）、「磨光韻鏡字庫」で開口ン合口ムとしたことは義門の指摘するところである。

羅常培氏の「一切韻閉口九韻之古讀及其演變」（中央研究院歷史語言研究所「慶祝蔡元培先生六十五歲論文集」一九三三年）に引く「磨光韻鏡」は閉口韻を全てム表記にしているが、これは延享元年刊の初版本ではなく、安政四年刊の三浦道齋校訂本（「漢吳音図」等によって改訂されている）によったためであろう（勉誠社文庫「磨光韻鏡」の林史典氏の解説中の版種の項を参照）。

(7) 謝啓昆「小学考」卷三六、李新魁氏「漢語等韻学」二三四頁、「四庫全書総目提要」（存目）をも参照。

(8) 柴田篤氏著書を参照。

(9) 九大本「韻学私言」では「葛幾」とあるが、「倭訓栞」、後掲の「韻学捷徑切韻纂要」とともに「葛起」とする。